
街の仕事屋さん +いろいろ。

三味線乃介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

街の仕事屋さん+いろいろ。

【Zコード】

Z2306BA

【作者名】

三味線乃介

【あらすじ】

古風な街の仕事人と、愉快な仲間たちの物語。

000 除靈がしたかったんです

ぼろぼろに崩れた赤煉瓦と、色あせた茶色の屋根を持つ館。

体育館ほどの大きさが、不気味さをより一層引き立てる。

かつて英國貴族でも住んでいたと言わなければ、嘘にはならない。けれども、そんな栄華は一片も残っていなかつた。

「おいおい、こんなところで仕事をするのかい？ 御免だね」

俺はわざと冷ややかに言つた。仕事がしたくない訳では無かつた

が。

「まあそこを頼みますよ、夜上さん^{やかみ}」

神父の服を着た男は、甘つたるい口調で答えた。話し方がムカつく。

大体なんで聖職者たる者が除靈もできないんですか、と言おうとしたが、その必要は無かつた。

「あの靈、ちょっと強いんだよ。ね、お金はいくらでも出すからね」

聖職者になつても金か、腐つてるぜ。

だが仕事が無くなつては困る。

「……分かつたよ」

俺はしぶしぶ了承したように言つた。

「ありがとう！ ジャ、健闘を祈るよ」

腐れ聖職者は何かを隠すように、走つて、どこかへ言つてしまつた。

おいおい、お札も持たないで大丈夫なのかよ？ 大体、除靈つて

いつても何すりやいいんだよ？

疑問はもう解消できなかつた。あいつ、逃げ足だけは速いな。

俺は舌打ちしてから、館と呼ぶにはあまりにも情けない廃墟に、足を踏み入れた。

俺は、夜上リュウヤ。

某国際都市の片隅で仕事人をしている。

仕事人といつても、人殺しをしている訳ではなく、犬の散歩をしたり、解体屋の手伝いをしたりしている。街の便利屋と言つたところだろうな。

除霊は何度もしたことがある。ただ、お札も持たず、除霊の手順もうろ覚えなのはこれが初めてだ。

懐中電灯だけで除霊ができるなら、観光客でもできるじゃないか。それを俺に頼むほどの理由があるのか？

まあいや、この不景気にいい仕事が来たもんだぜ。

それにして不気味だ。西洋人はこんなものに神秘を感じるのか？ 今も昔も埃だらけだつたんだろうな。

廊下も無駄に長い。そのうえ赤絨毯が敷いてあるが、高貴な気分にはならない。

何も出なかつたらそれはそれで問題だがな。

聖職者が幽霊を何かと見間違えたんだつたら、もう笑い話だ。ははは、と大きな声で笑つてみた。

声が廊下中にこだまするだけで、返事は無い。

さつきからドアを開けたり閉めたりの単純作業が続いている。飽きてきたが、ただで帰るわけにはいかない。

……そうだ。

出でこないなら呼び出せばいいじゃないか。

俺は木製のドアを開けて、部屋に入った。
召使いの部屋だろうか。いつかの高貴な館にしては、随分と小さな部屋だ。

埃を被つた本棚には、年季のある本が揃つている。

その中に申し訳なさそうに置かれた、黒いインクの入った瓶。テーブルの上には、先端が黒ずんだ羽ペンが寂しそうに置かれていた。

椅子に座つて、ペンを握つてゐる。なんとかなりそうだな。
次いで本棚から縁表紙の本を取り出した。

それから適当なページを開いて、破り取つた。にじみそうだな。
最後に、インクを取つて、瓶の蓋を開けた。勢い余つて少しこぼしてしまつた。

ペンの先をインクに浸した。そして、一気にアルファベットを書き上げた。

日本人に語つた「じゅくりさん」をやる時が来たよつた。まさかこんな所でやるとは思つてもいなかつたが。

硬貨は……無いな。ペンでもいいだらうか？

ペンの先を鳥居としらシンボルの上に乗せて、静かに書つた。

「じゅくりさん、じゅくりさん、どうぞおいでください。もしもいになられましたら『はこ』へお進みください」

反応しない。もう一度、書つた。

「じゅくりさん、じゅくりさん……」

そこまで言いいかけたといふ、いきなりペンが動き出し、「はこ」へ向かつて動き出した。

驚いた。マジでなるのかよ。

しかし驚いてばかりもいられないので、次の質問に進むことにした。

た。

「鳥居にお戻りください」と書つて、ペンはゆくべつと鳥居に向かつて動き、止まつた。

「じゅくりさん、じゅくりさん、この館で怪奇現象が起つていることをじ存知ですか」

ゆくべつと「は」。女性の声が聞こえた。

思わずペンを投げ捨て、声がしたほうを向いた。

じゅくりさんの途中で持つてゐるもの放してはいけないそりだが、関係ない。

そこに居たのは、真つ白な女性の幽霊だつたから。

001 借り暮らしのなんとかティ

「う、くつさんをしていたら、本物が現れた。しかしそれはいわゆる幽霊といった類からはかけ離れていた。いや、あまりにもかけ離れすぎていたので、俺は口を開けたまま何もできなかつた。

毎度の事ながら、幽霊というのは綺麗な人が多いもんだなと思う。彼女の肌は、絹のように白い。というか、全てにおいて白い。布のような服を着ているようだが、ちょっと危なつかしいぜ、これ。

「どうしたの」

彼女はきょとんとした顔をしながら言つた。強気なもんだ。おそらく箱入り娘だつたのだろう。仕事には関係ないか。俺は少し考えた。そんなに強い靈だとしたら、ただでは済まなさそうだが。

「罰ゲームで肝試しすることになつてね」

少しおどけた感じで言つてみた。あれ、待てよ？　ただのいじめられつ子じやないか！大体、こんな所に一人で来ている時点でもうかなり怪しいぞ。……などと思っていると、彼女はいきなり微笑んだ。

「除霊でしょ？」

「うん、まあ」

おおかた予想はしていたが、バレバレだつた。まあこんな所に好き好んで来る人はそういうもんな。

「あんた面白そうだね。名前はなんてーの」

「リュウヤだよ」

「よろしくね、リュウヤ。あたしはミユーズつて言つの」

そう言つと、彼女は手を差し伸べた。白くて、本当に綺麗な手だ。彼女の手を握るうとしたが、つかめない。そうか実体がないんだなと改めて思つたが、だからといって握手しないわけがない。優しく、彼女の手を包み込むように握手をした。

「で、本題なんだが、除霊を……」

話を切り出そうとして、ためらつた。こいつはそんなに悪い奴じやないぞ。何か目的があつて、ここを荒らす人を追い払つてるんじゃない。

「やめた。除霊はしないから、他人に迷惑をかけないでくれるか」「いいよー」

彼女は笑顔でそう答えた。あつさりしてゐなあ、こいつ。

「その代わり、お願ひがあるの」

「等価交換つてやつか。何だ?」

「あたしがいなくなつたら、ここもじきに取り壊されると思つ」

「そなうなるだらうな」

「でも、あの首輪だけはとつておきたいの」

そう言いながら、彼女は本棚の上に置いてある銀の首輪を指差した。あんな所にあつたのか。

「それとさ……行き場所が無いんだ、あなたの家に住んでもいいかな」

えつ、そなうなのか?

「まあ……それでいいなら構はないぞ」

「やつた!」

彼女は満面の笑みを浮かべた。仕事はもうどうでもよかつた。それより完全に落ちぶれてしまつた神父のほうを憎たらしく思つた。俺は立ち上がり、本棚の上の首輪を取つた。光沢を放つその首輪は、彼女の首の大きさにぴつたりだつた。だが実体が無くなつた今では、それは意味を成さない。今は彼女の願いを叶えてやるのが仕事だ。

「じゃあ行くか」

俺とミコーズは部屋を出た。古い館を出ると、新しい街がいつもより古く見えた。太陽は少し傾きかけていた。何人か振り向く人がいたようだが、別にどうでもいい。害が無いのを連れ回して何が悪い! つてか、見える人つて思つたよりいるもんだな。

家に戻ると、胡散臭い口調の聖職者が待つていた。

「やべえ神父だ、隠れろ隠れろ」

「えつ、えつ」

ミコーズはどうやら間一髪で隠れたようだ。うざこ男がこっけこ

向かつてきた。

「いやあ助かつたよ。おかげで教会の威儀を失わずに済んだよ。報酬はいくらにしようか？」

黙れ、俺はお前らの威儀のために仕事をしてるんじゃないんだよ。勝手な勘違いはこれでお終いにしろカルト団体め。心の中でありとあらゆる罵詈雑言を吐いた。

「幽靈なんていなかつたぞ」

「えつ」

神父は鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をしていた。正確にはいなくなつたんだけどな。

「また冗談を、ほら、あそこにいたじゃないか」「何かと間違えたんだろう。とにかく全てチャラだ、報酬はいらなり」

「そうだつたか……とにかく、うん、ありがとう」

そう言って、落ち込んだ神父は足早に去つていった。なんとかごまかせたみたいだな。

「おい、もういいぞ」

俺は屋根の上に隠れていたミコーズを呼んだ。彼女はすぐに降りてきた。

「ふいーつ、神父つて怖いね」

彼女は震え上がりながら言った。すごく怖がっている。

「そうか？ 俺にとつてはただの黒い服のおっさんなんだが」

俺はそう言って、ペットボトルの水を一気に飲み干した。冷たい感触が喉の中で踊る。今日もいい仕事をしたものだ、と思った。

俺たちはドアの鍵を開けて、中に入った。いつも通りの、でかいテーブルと少しの植木鉢しか置いていない、殺風景な部屋だ。

「何も無いね。絵でも買つたら？」

「うるさい」

買いたいのはやまやまなのだが、そんなことをするとあつという間に火の車だ。それなら消費支出に充てるほうがいいだろ?。我慢してくれ。

「で、どこで寝たらいい?」

「そうだな……」

俺は少しためらつた。幽霊も寝るのかと思つたが、それ以上に問題なのは、仮にも女子と同じベッドで寝るのはどうかということだ。

「ベッドがな……一つしか無いんだが……まあいや、ベッドで寝てくれ」

決断した。その気になれば、地べたでだつて寝られるはずだ。

「えつ、いいの? 本当にいいの? 後悔しない?」

「しつこいなあ、大丈夫だよ」

思わず激しそうになった。少し落ち着け。仮にも相手は箱入り娘だぞ、言葉遣いの一つや一つ氣にしていたら気がふれちまう。

俺はオフィス(といつても、接客するだけの場所なのが)から階段を上り、寝室に向かった。階段はミシミシと音を立て、今にも崩れそうだ。……妖怪退治でもして稼ぎたいものだ。

「へーえ。妖怪退治とかどうなの?」

えつ。ちょっと待つて、俺はまだ何も言つていないぞ? おおかた予想はしていたんだが、そういうのもありか。

「あたし、心が読めるんだ」

「ははあ」

俺はおどけた口調で言つた。久しぶりの感覚だった。何年も接客をしていると、「ごくたまに(それも年に数回だが)超能力と言つべきか、そんな人が訪れるのである。そのときの驚きと少し的好奇心に似た感覚が蘇ってきた。経験から来る、俺の後天性の超能力が反応したのであつた。

「すげーな、いつからできたんだ?」

「どうか、話題ができたので助かつたといったところだ。

「生まれたときからあつたよ。なんていうか、考えることが、そ

のまま私に伝わってくんだ

「なるほど」

「これは何か事件でも起きそうだな、と思った。

さて。部屋に入ると、俺は蛍光灯の電源を入れた。ここで気付いたのだが、ミューズは光が嫌いではなさそうだ。

「お前、光は平気なのか」

俺はそう尋ねた。

「うん。やっぱり苦手だらうって思ったでしょ

「そんなもんじやないのか」

「幽霊はイレギュラーしかいないんだよ

そうか、と俺は思わず感心した。本当に面白い奴だと思つ。今までいろいろな人と接してきたわけだが、こんなに面白い奴は初めてだ。第一幽霊は除霊という言葉を聞いただけでみな震え上がるものだろうと思っていたが、こいつは何も怖くはなさそうだ。ひょっとしたら除霊が何をすることなのか理解していないだけなのかもしないが。ただなぜか神父のことをひどく怖がっていたようだ。やはり幽霊としての意識はあるのだろうな。さあて一段落したところで、ふとミューズを質問攻めにしてみようかなと思つた。困ったことに、俺はたまに人を質問攻めにしてしまう癖がある。

「ちょっと質問してもいいか

俺はそれを始めるとき、決まっていつもこう呟つ。

「いやーだ、あつかんべえ

きつちりあかんべえ付きで断られてしまった。なんか可愛いから許してしまいたくなる。と思っていると、彼女はいきなりベッドに飛び込んで、うつ伏せに寝てしまった。

「どうしたんだ?」

「寝る

「そうか

やっぱりお化けであることに変わりはない。俺もちょっと寝るかな。押入れから布団一式を取り出して、そのまま布団にへりまつ

てしまつた。たまの昼寝はいいものだなあ、これからは三食昼寝付きのビジネスに切り替えるかな。うん、それがいい。ついつい一人問答をしてしまつた。

「リュウヤあ

甘い、眠たそうな声が聞こえた。

「何だ

「起きてる?」

「ああ。どうした

「おやすみ!」

「それだけかよ

俺はそれだけ言つて、ふいと深い眠りについた。こんな他愛も無い会話が、いつまでも終わることなく続けばいいのだが。

目が覚めた。枕もとの時計をつかんで、顔の前に近づける。午後八時だつた。まだ良い子も眠つていない時間に起きてしまつた。さてこれからどうしようと思つてベッドの方を見ると、そこにはしわだらけの布団だけがあつた。

ミコーズがない。どこに行つてしまつたんだ、あいつは。あれ返つたところで、幽靈だからなあと思つて電気をつけ、布団をしまおうとすると、

「ねえ、かくれんぼしよ

という声が聞こえてきた。腹話術のような、どこから聞こえたともつかぬ声だ。靈感の無い普通の人なら腰を抜かしかねない。まあ慣れもあるだろうがね。

「いいぜ。ただし、こつしょり。負けたら今夜は勝つたほうの言つこと聞く」

「面白いじやん

童心に帰つて楽しむとするか。

「鬼はリュウヤがやって」

ミコーズの声が聞こえた。助かつた。レーダーみたいに人を見つけられては困る。しかしここでもう一つの問題が浮かび上がつた。南無三、あいつは幽靈で、姿を隠せるじゃないか！ どっちにしろ厄介なもんだ、と思いながらも仕方が無いので立ち上がり、辺りを探してみた。見つからん。クローゼットの中にも、ベッドの下にも、窓の外にも、どこにもいない。部屋中探してみたが一向に見つかる様子は無い。姿を隠しているのかも分からぬ。

ふと 僕の脳裏に妙案が浮かび上がつた。これなら勝てる！

幸いなことに家の周辺には空き家しかないので近所迷惑にもならないはずだ。俺は吸えるだけの空氣を吸い込んだ。そして、ただ一言、

「神父だつ！」

と叫んだ。どつと疲労が襲ってきた。鏡を見ると、顔が真っ赤になっていた。肩で息をしながら部屋中を見回した。

そのときだ。背骨から何かが抜けるような不思議な感触があった。一瞬吐き気を催したが、それが何かを理解するのに時間はかかるかつた。背中からミユーズが、掃除機の「コード」を引っ張ったときのように戸出でてきた。

「こやーっ！ お願いやめてやめてえ！」

と思うと、いきなり泣き喫き、地面に仰向けになり、じたばたと足を動かした。駄々をこねている子供のようにも見えた。ちょっとやりすぎたか。

「はは、「冗談だぞ？ 神父なんていない」

声をかけてみたが、まだ泣き止まない。ちょっとした悪戯のつもりだったが、トラウマを呼び起こしてしまったようだ。いかんいかん、どうにかして落ち着かせなければ。俺はベッドに座り、ミユーズを抱き寄せた。不思議なことにそのときは気付かなかつたが、感触があつた。彼女は少し戸惑つたようだ。優しく頭を撫でた。ようやく泣き止んだようだ。彼女はじっととした目で俺を見つめた。

「「めん」「めん、そんなに怖がるとは思わなかつたよ。かくれん

ぼは俺の負けだ」

俺は子供の頃のよう、優しく語りかけた。

「むー、ひどいよー」

彼女はふくれつたらになつて言つた。可愛い。早くこいつが安心できるような世界になつてほしにものだ。教会を潰すほうがいいのか。そんなことを思いながら深い眠りにつこうとしていた。

「約束だよ」

ああそうだった。やべえよ、何を言つたられるか分からんぞ。箱入り娘さんよ、ビックリ軽めの刑でお願いします。

「今日はこのまま寝よ？」

戸惑つた。おいおいどんな爆弾発言が出るかとは思つていたが、マジか。だが命令には背けない。それに、そなことで許されるの

なり向でもやつてやる。

「おーケーだぜ」

俺はこのままベッドに飛び込んだ。今考えるとものすごいセクハラだったんじゃないかと思つ。彼女の肌は温もりを持つていた。さながら生きているようだつた。彼女はもう眠りについていた。起きるのも寝るのも早いな。俺も早く寝よう。

幽靈に負けてしまった。何だか別の意味で悔しかつた。まあ自分から負けに導いたようなもんだが。子供の遊びは、正々堂々とやるからこそ面白さがあるんだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2306ba/>

街の仕事屋さん +いろいろ。

2012年1月10日20時46分発行